



母と娘の一筆箋

桜木 晴代

我が家には夫が作成した『母と娘の一筆箋』という(母・私・娘の三代) A4 版の冊子がある。その冊子が生まれる経緯をはじめに記している。

『断捨離』が昨今の巷のテーマ。分かっているけどできないのが私です。モッタナイオバケがムクムクと…。捨てられないとえ包装紙も、空き箱もどんぐりも…。昨年(2012)死去したノーベル平和賞を受賞したワ



ンガリ・マータイ女史は『MOTTAINAI!』という言葉を知り、物を大切にすることを世界に広めました。私は家族の冷ややかな目と言葉を浴びるのみ。それでも私の捨てられない習癖が意外にも喜んでもらえることもいくつかありました。一つは高校の同期のお母さんでした。同期の公子さんは目のパッチリした色白の美しい声の持ち主でした。今でも彼女の『冬の星座』の澄んだ歌声が聞こえてきます。よき娘、よき妻、よき母であったらう彼女は、一昨年、ガンで亡くなりました。昔、彼女がくれた弟誕生を喜ぶ葉書を探し出し、友人経由で、彼女のお母さんに届けてもらいました。お母さんは、思いがけない娘との『再会』に泣けて泣けて仕方がなかった、ということでした。他にも50年以上前の葉書や手紙を手渡して驚かれ心から喜ばれたこともあります。この冊子の完成も、私の捨てきれない習癖ゆえに可能となったものです。遠く離れた調布の母とのファックスの日常のやりとりは、いずれできなくなる日が訪れると思うと、絶対に捨てられないと私は思っていたのでした(略)

344 ページの中に家族や、好んで訪れた鰻屋や蕎麦屋、趣味の手づくり品などの写真が約500枚掲載されている。家族限定配付とし、子どもと叔母に贈った。子どもたちは、可愛がってくれた祖父母のことや出来事を懐かしみながらアルバムとして活用している。

母はもともと文を書くことが好きな人でもあり、朝に夕に頻りにファックスが届いた。文を書くのが苦手な私も手紙より手軽なので書いては送っていた。その往復書簡を手元に残していたのだ。

母は7年前に86歳で他界し、今、実家では娘夫婦が暮らす。母亡き後、娘との通信は専らメールやかけ放題のケイタイ電話になっている。

ファックス通信としては最後と思われる娘からのファックスが残っていた。

『母と娘の一筆箋』全て読み終わりました。おばあちゃんもお母さんも植物好きなので日付がなくても季節が分かりますね。

電話より経済的なファックスを使っただけの会話がこんな形で生かされたことは本当に素敵なことだと思います。

私は上京してからおばあちゃんが亡くなるまで孝行もせず、ダメな孫であったとは思っていましたが、おばあちゃんのファックスを読み、もっと明らかになり、当時の事を思うと堪らず、本を伏せてしまう事もしばしばでした。

私は自分の夢を実現させるため、家族に迷惑をかけ、家族に支えられてやってきたのだと改めて知ることになり、家族を一層大切に思えるようになりました。私の生活ぶりはおばあちゃんに寂しい思いをさせ、その愚痴の聞き役がお母さんだったのです。お母さんにも申し訳なく、自分が情けないです。

おばあちゃんがいなくなって3年が過ぎた今、こうして冊子を読んでいるとおばあちゃんが近くに感じられて嬉しいです。今年はおばあちゃんが大事にしていた梅の実も沢山なり、生前におばあちゃんを労われなかった分、大切にしていた物だけでも大事にしたいと思います。家族の大切さを改めて感じさせてくれたこの冊子に感謝しています。有難うございます。」(娘の社会人としての第一歩は東京の母との暮らしから始まった。娘のために喜んでお弁当を作っていた母も年と共に気力・知力を低下させ、その姿に戸惑う娘との間に埋め難い感情の齟齬が生じていた。娘同様、私も母に十分なことができなかったと未だに悔やんでいる。)この冊子はわが家の宝物となっている。